

教えて！  
加藤先生

## 「考える道徳」の評価とは？！

# “そうだったのか！” 教科としての道徳の評価

### 【子どものどのような変容を見取るのか？】

当然のことですが、子ども自身の成長の過程を具体的な事例をもとに見取ります。それは1時間の授業の中でも見取ることができますし、授業の積み重ねの中から複数時間を取り出した中からも見取ることができます。また、その内容は、価値観や学び方の変容もあるでしょう。いわゆる「学習状況や道徳性に係る成長の様子」です。

“何ができたか、できるようになったか。”ではなく、“何について考え、気づきを得ることができたか。”を見取るようにしましょう。

### 発言

今日は、あいさつについて考えました。さいしょは、ただあいさつは声を出すだけだと思っていました。でも、どうとくのじゅぎょうをして、人の気持ちを考えて、ていねいに心をこめて、しっかりとあいさつをすることのたいせつさが分かりました。

「あいさつ」の授業で、初めは声を出すだけだと思っていたけれど、人の気持ちを考えることが大事だということに気づくことができました。

通知表レベルの評価は、例えば「挨拶の授業では……。」というように、具体的に評価の言葉を記述するとよいでしょう。

(Aさん)

最初は、個性という言葉を知り、個性はたくさんあるなあとしか思っていました。けれど、みんなの意見を聞いて、私は、個性をけずると個性が出てくるんだなあと思いました。

1時間の授業の中で、自分の価値観の変容をしっかりと自分事としてとらえることができ、学びに対する意欲の高まりを感じます。

Bさんは、1時間の中で価値観の変容を自覚し、友達の意見を元に多面的・多角的に考えている様子が見えます。それを評価します。

(Bさん)

### ノート

Cさんは授業中の板書を自分なりのまとめ方でノートに書き、そこからキーワードを大きく書き、色も変えて示しています。

Cさんは、友達の意見を取り入れながら、多面的・多角的に深く考え、自分の言葉でまとめることができるようになってきています。



Cさんは自分なりに工夫しながらノートをまとめ、友情の授業では、「一方通行じゃダメ」と、自分の言葉で考えを整理できていました。

「1回目と32回目」というように、自らの学びを大きくくり自己評価できています。「他の人の意見を……」の実感も学習状況が分かります。

(Cさん)

## 秘伝！道徳評価の裏技 (プロの見取り法・活用法)

### 教師にとっての評価 (授業改善への活用)

教師から見た評価の意味は、子どもたちがよりよく生きる主体として育つための授業改善です。

つまり、「何をしようとしたか。」というねらいに対して、「何ができたか、できなかったか。」という達成度を教師自身が自己評価するためのものです。子どもたちに深く考えさせることができなかつたら、それは教師の展開に問題があったというように謙虚に受け止め、改善に努めるべきです。子どもたちの反応をリトマス試験紙ととらえて、自己の授業に向かう姿勢を振り返りましょう。

そのような授業改善の評価をきちんとすることができるように

にするためにも、授業のねらいをなるべく具体的に書くことをおすすめします。

その上で、この教材で内容項目をどのように考えさせるのか、そのための発問はどのようなものがよいか、そしてそれらを効果的に行うためにはどのような板書の工夫が必要か、という手立てを考えます。

このように「何をしようとしたか。」が明確であれば、その上でとった手立てが効果的だったか、改善策はどのようなものが考えられるかが見えてきます。子どもたちの反応の一つ一つに意味を見いだすことができるのです。

### 「発言」の評価

子どもたちは様々な方法で発言をしています。授業中にしっかりと挙手して発言するのが一般的かもしれませんが、語り尽くせぬ思いをたどとしく言うのも立派な発言です。同様に、つぶやきや、道徳ノートに書かれた記述といったものも、貴重な発言材料として扱うべきです。

それらの「発言」のどこを評価するかといえば、上手いよほどなく発言できたかではなく、「自分の思いを自分の言葉で一生懸命言葉にしようとしたか。」ではないでしょうか。

つまり、結果ではなく過程、学習状況なのです。

どの教科もそうかもしれませんが、特に道徳の場合、きれいな答えを求めすぎると、子どもたちは形を追い求めるようになり、最後は形を取り繕うようになってしまいます。せっかく「分かりきったことを言ったり書かせたり」という世界からの脱却が叫ばれているのですから、答えらしきものではなく、自分がよしとする考えを出そうとする、考えようとする姿勢を評価してあげたいものです。

### 「ノート」の評価

ノートは評価のためにあるものではありません。子どもたちが自分自身の考えを広げ、深め、まとめるためにあるのです。だから、思考の経緯が書かれているのがよいノートです。結果だけ書いても意味がありません。

経緯が分かるからこそ、今、評価で問われている「学習状況や道徳性に係る成長の様子」を「なるべく具体的に」しかも「大きくくり」に見取ることができる、重要なデータとすることができるのです。

道徳ノートを評価のために使うのではなく、子どもたち自身の学びのパートナーとして、授業中も授業後も自由に書かせる環境を整えることにより、結果的に評価をするためになくはならないものになるというわけです。皮肉なものです。

ですから、ノートで一人ひとりを見取り、評価するためには、なるべく各自の創意工夫をする余地を与え、自由に書かせることです。そうしないと、一人ひとりの顔が見える評価はしにくくなってしまいます。

### 発言やノート以外の評価

#### 【授業中】

しぐさや態度、ペアやグループでの話し合いやつぶやき、それら全てが大切な評価の材料となります。それを察知し、はっきり手を挙げていなくても、「何か思いついたことがあるなら言ってごらん。」というように、意図的に指名し、背中を押してあげることも評価ですし、「〇〇さんの言った意味はこういうことかな。」と、補足してあげるのも立派な評価です。指導と評価は表裏一体、子どもたち一人ひとりのサインを見逃さず、きちんと応対してあげたいものです。

#### 【授業後】

深く考え、議論する学習ができると、授業が終わっても考え続け、休み時間も黒板に考えを書いたり、家に帰ってから家族と話し合いをしてノートにまとめたりするような「学習活動」も見られるようになります。教師は、それらを観察したり、ノートから見取ったりすることができます。

それらの様子を認め励ますコメントを書けば、自然に、

●一人ひとりの顔が見える

●根拠があって具体的な

評価の記述とすることができるでしょう。

初めて道徳ノートを使う方へ

**新刊** ゆたかな心を育てる **道徳ノート**

学校納入定価 **170円** (消費税込み)

①めあて ③授業の振り返り

②授業中 ④生活につなぐ

- どの教材でも使える標準版
- 1教材1見開き
- 1~6年
- A4大判・48ページ
- 教師用書 (A4判) 16ページつき

監修 筑波大学附属小学校教諭 **加藤 宣行** 千葉大学教授 **土田 雄一**

「ノート」の評価の可能性

道徳ノートを自由に使わせる環境を整えると、子どもたちはこちらの想像を超える学習活動を始めます。右の写真は、授業で扱った教材で取り上げられていた場所を自ら調べに行った4年生のDさんの道徳ノートです。Dさんはその場所に行って、写真を撮り、それを道徳ノートに貼って、感じたことや考えたことを書き記しています。授業が終わっても考え続け、それを受け止めてくれるノートがあるからこそ、意識は継続し、学びは持続します。